

弥生の高地性集落 「会下山遺跡」からロックガーデンへ ハイキング

阪急芦屋川駅-会下山-風吹岩-ロックガーデン-高座の滝-阪急芦屋川駅

egenoyama00.htm by Mutsu Nakanishi 2006.7.14.

1. 弥生の高地性集落 「会下山遺跡」から ロックガーデンへ

- 1.1. 会下山の狭いやせ尾根の上に並ぶ弥生の住居跡 会下山遺跡へ
- 1.2. 弥生の高地性集落概要と 会下山遺跡の発掘当時の写真
- 1.3. 会下山遺跡から 魚屋道を通して ロックガーデンの頭 風吹岩へ
- 1.4. ロックガーデンを高座の滝へ下る

2. 弥生の高地性集落 会下山 遺跡 概要

3. 高地性集落 会下山の集落の出現 大阪湾周辺で 何が起きていたのだろうか



ロックガーデン 風吹岩から会下山・大阪湾を望む 2006.7.14.

阪急芦屋川駅において、北側に連なる六甲の連山を眺めると芦屋川の西側の住宅地のすぐ奥に六甲連山をバックにこんもりとした2つの山が見える。西側が会下山 東側が城山。尾根筋を登って この山の上に行くと芦屋の市街地から大阪湾・淡路島が一望できるという。弥生時代には この二つの山の上に高地性集落があり、下の平野部にある集落と交流しながら 大阪湾をみはっていたという。

「芦屋の会下山 知っていますか・・・ 会下山の高地性集落遺跡が発見されて50年その記念シンポジウムが6月の末にあるのですが出ませんか」と誘いを受け、シンポジウムには出席できなかったのですが、そのシンポジウムの資料をいただいた。

その資料を読んでいて、中学生の頃 この会下山のすぐ下にある山手中学に何度か試合に出かけたことがあって、発掘調査中の遺跡を見た記憶をたどっていました。山手中学の周辺で発掘がいくつかされて、この周りには遺跡が多いと会下山の名前と共にぼんやりの記憶。高地性弥生集落遺跡などの言葉も知らず、何とはなしに古い遺跡が山裾にあると・・・。

7月14日朝三宮に出かけようと家を出ると梅雨の中休み快晴。これは山に行かん手はなし。

予定を変更して 久しぶりに高座の滝・ロックガーデンへ行ってみようと思えばコンビニでペットボトルの水を買って阪急電車に飛び乗る。久しぶりとはいえ よく知った場所なので、山手中学目指せは どうにかなるといつもの風来坊。梅雨とも思えぬ快晴の暑い日差しの中を会下山に登って高地性弥生集落遺跡を見学。そのまま風吹岩まで登って ロックガーデンを下って 高座の滝へ下りてきました。ほんとに久しぶりのロックガーデンもこんな

に樹木がおおかったか・・・と。昔の記憶とは随分違っていました。

また 弥生の高地性集落 会下山遺跡も ひそかに「本当は山中にある弥生の隠れ里 縄文の暮らしもあったのではないか」などと思っていましたが、登ってみて「こんなやせ尾根の山の上に集落 これは意図的な村だ」とつくづく感じました。

調べてみると この会下山から大陸と関係の深い「漢式三翼鏃」と数々の鉄器が出土している。

資料によると 稲作と鉄が日本に「戦」を持ち込んだといわれ、時代と共にその戦いの対象レベルは違っているが、高地性集落が交流する連合体の監視・通信の役割を担っていた村ではないかと見られている。

弥生時代中期以降 邪馬台国成立・大和王権へと国づくりが進む過程で高地性集落が次々出現する瀬戸内沿岸は自前の鉄をもたぬ日本が 朝鮮半島の鉄を求める重要な鉄の伝来・交流ルートでもあり、渡来人との関係も深く大和王権の確立まで幾多の戦いが繰り広げられたところ。

弥生の高地性集落の出現は邪馬台国成立前史を飾る激動の時代の象徴であるともみられる。

「この弥生の高地性集落を調べれば、鉄の痕跡が見えるのかもしれない」

岡山総社の「鬼ヶ城」 伯耆妻木晩田遺跡 大阪交野生駒山西端交野の高地性集落 いずれもその周辺には渡来人と関係の深い鉄の集団がいた。

弥生の高地性集落にはそんな鉄のつながりがあるのではないかと・・・との夢を膨らましています。

そんなきっかけになった会下山高地性集落遺跡・ロックガーデン ハイキングをまとめました。

1. 弥生の高地性集落 「会下山弥生遺跡」から ロックガーデンへ 阪急芦屋川駅-会下山-風吹岩-ロックガーデン-高座の滝-阪急芦屋川駅



六甲の山々から平野部に出る山裾の傾斜地に高級住宅地が広がり、その中央を流れる急な芦屋川が流れ下る芦屋の山手。

関西では誰もが知っている六甲へのハイキングコースがいくつもこの芦屋川から伸びている。

六甲は高度こそ低いのですが、幅の狭い阪神間の平野部から急に立ち上がる連山が続き、しかも花崗岩の風化が進み、急峻な尾根と谷を形成。

中でも ロックガーデンは 風化が進んだ岩屋まで、関西のロッククライミング発祥の地であるとともに、この急峻な岩山を見ながら六甲の稜線へ登ってゆくハイキングコースがいくつもある。会下山弥生遺跡は芦屋川からそんなロックガーデンへ上ってゆく入り口の急峻な細い痩せ尾根の尾根筋の山道を30分ほど登ったところにある。

そのまま尾根筋を登ってゆくとロックガーデンの谷筋を右に巻きながら 隣の神戸東灘から六甲を越えて有馬への六甲山越えの古道「魚屋道」と合流して ロックガーデンの頭 風吹き岩に一時間ほど出る。

眼下にロックガーデンの荒々しい岩山が並ぶ谷が一望でき、その向こうに大阪湾・淡路島が遠望される。表六甲の代表的な景観である。

今日は気楽に弥生遺跡を見て ロックガーデンのハイクを楽しむつもり。

1.1. 会下山の狭いやせ尾根の上に並ぶ弥生の住居跡 会下山遺跡へ



阪急芦屋川駅から北に芦屋川に沿って緩やかに登ってゆく。

500メートルほど登ったところ高座川との合流点の手前にある開森橋のところ左に折れて会下山の山裾の住宅地の中に入ってゆく。開森橋からは 芦屋川の正面に城山・その西に会下山の尾根筋がよく見える。

少し登ったところで、高座川を遡って行く高座の滝・ロックガーデンのハイキングコースの道と別れ、そのまま西へ会下山の尾根の方へ登ってゆく。ここまできれば、会下山への標識はあるだろうし、山手中学を探せばすぐ会下山の登り口はわかると思っていたのですが、それが間違い。山手中学の裏手からの道は山手中学の中からしか行けず今は通行禁止。会下山の尾根筋の下に広がる住宅地の中を人に聞きながらグルグル。

やっと旧三条小学校裏の墓場の中を抜けたところに会下山の尾根への上り口を見つけました。



ここからは尾根筋に登る樹林の中の急な山道である。何度か折れ曲がりながら尾根筋の西側の崖に沿ってつけられた山道を登りながら尾根筋の上へ向かう。

有名な遺跡なので遊歩道でもついていると思っていましたが、完全な山登りハイク。でも 久しぶりの山歩きに汗が心地よい。木々に囲まれ 道はよく整備されているのですが、あまり ハイキングにはつかわれぬ道、まったく人の気配の感じられぬ山の中である。30分ほどでやっと樹林の中の尾根筋の上に出る。尾根の上といってもやせ尾根ですぐ向こう側も谷へ落ち込んでいるのが木々の間から見える。

木々の中につけられた尾根筋を少しよじ登ると少し広くなったところがあり、会下山弥生遺跡の案内板があり、尾根の反対側へ少し降りるとさらに広くぼ地があり、そこに復元された倉庫が建っていた。狭い尾根筋に竪穴住居跡地が3棟 下のくぼ地に倉庫と竪穴獣まよ跡地が数箇所木々の間にありました。





尾根筋の上に並ぶ会下山遺跡の竪穴住居跡 会下山遺跡の中心部 2006.7.14.



尾根の東側のくぼ地に復元された倉庫跡 2006.7.14.

展望もあまり利かずですが、木々の間から下の山手中学など市街地がちらちら見える。

発掘調査時は360度展望の利く禿山のように見えるが、尾根筋には木々がしげって そんな面影はない。

発掘当時の写真を見ると尾根筋の木々がまだ小さく 360度展望がひらけ、尾根の形もよくわかりますが、今は尾根全体が木々に包まれ、視界が聞かない。

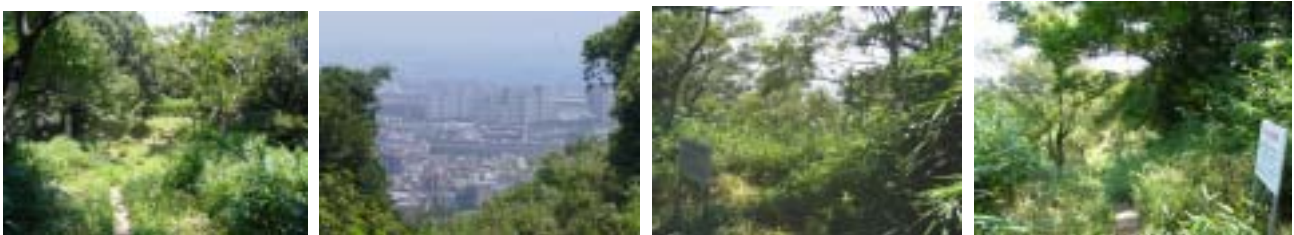
案内板によると会下山高地性弥生集落遺跡はおよそ2000年前の紀元前1世紀から紀元1世紀にかけての弥生時代の高地性集落。

大阪湾を眼下まじかに見下ろす標高160m~200mの山頂尾根に40人前後の人々がすみつき、炊さんをともにして、低地の村々とも交流しながら、海上交通の見張りなど活発な社会生活を送っていたと考えられている。

発掘当初は2世紀末「倭の大乱」の時代 群立する国と国との対立の備えの集落と見る説もありましたが、それよりも以前の時代 かぎられた地域間たとえば川筋を単位とする利水・灌漑をめぐる争いなどの備えであったとも見られる。

いずれにしろ 山裾に水田耕作の集落が広がる中 意図なしでこんな山の中に隔絶した集落は存在しなかったと見られ、やはり、戦いの備えや戦いの集団祭祀の場などであったと考えられている。

尾根筋をさらに上へ登った一番高いところに祭祀跡があり、おそらく弥生の時代にはもっとよく展望が聞いたのかもしれませんが、ここからは 木々の間から、大阪湾までの展望が開けました。



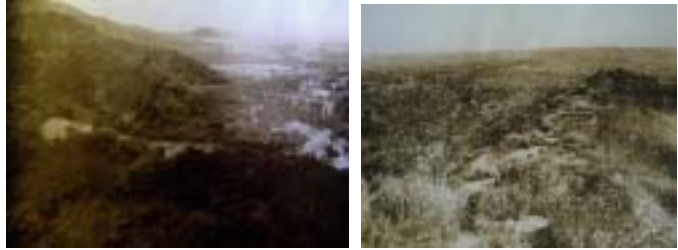
尾根筋の一段高い頂上部に祭祀跡の案内板
その周辺からは下の市街地・大阪湾が遠望できました 2006.7.14.

1.2. 弥生の高地性集落概要と 会下山遺跡の発掘当時の写真

会下山遺跡発掘50周年記念シンポジウム資料「会下山から邪馬台国へ 高地性集落の謎と激動の弥生社会」より



高地性集落 会下山遺跡の位置と尾根筋の出土遺構の配置図



発掘当時の会下山遺跡周辺の写真



弥生時代の西阪神の集落分布 & 会下山遺跡と平地部の集落

弥生時代の高地性集落は平地の集落と連携しつつ、瀬戸内の見張りなどの任務を担っていたと考えられる。この会下山遺跡の下の平野部一体には水田耕作の集落が点在し、これらの平野部の集落と高地性集落とは交流があったと考えられている。

また、銅鐸がこの表六甲の山々に数多く持ち込まれて埋められているのも、この地が畿内の端・瀬戸内海の東端にあたることによると考えられ、この地の高地性集落の役割で、ある異なる勢力の監視などと絡んでいたのかもしれない。

鏃のささった人骨がこの大阪平野のあちこちで見ついていることなどから、規模はよくわかりませんが、この地域で戦いがあったことは間違いない。

会下山遺跡に立つまでは

「平野部は湿地が多く、災害に弱いし見通しも悪く住みにくいのではないか・・・

むしろ縄文のスタイルを捨てきれずにいる民が山と平野2つの村を行き来していたのではないかと・・・」
などと考えていました。

でも 会下山遺跡は急峻な脊尾根の上でこの尾根の東に沿う谷はロックガーデンの岩場が続く急峻な谷。とても耕作に適しているとは思えないし、また、頻繁な往来・物流には向いていない。

会下山の下で発掘調査をしていた学芸員の人によれば、同時期にすぐ下の平野部には水田耕作の集落が幾つも展開されていたという。

一番頂上の物見には祭祀の場の石組みも残っている。また、ノロシ場かもしれぬ焼土坑も見ついている。やっぱり、瀬戸内海の見張りの集落か・・・弥生中期以降 この大坂湾沿岸の平野部で数々の戦いがあったことは武器の刺さった戦死者の墓の急増で理解される。

大規模な灌漑設備と開墾による稲作が急発展し、鉄器が急速に増加するのもこの時期である。水田耕作の拡大には灌漑・利水の大規模な土木工事が必要であり、鉄器の使用は比すであり、また この灌漑・利水は川の流域を単位とした地域間紛争を巻き起こしたに違いない。



会下山の頂上部 祭祀跡のある周辺
昔はもっと広く大阪湾や阪神間の平野部がよく見えたのだろう

1.3. 会下山遺跡から 魚屋道を通して ロックガーデンの頭 風吹岩へ

阪急芦屋川駅 - 会下山 - 風吹岩 - ロックガ - デン - 高座の滝 - 阪急芦屋川駅

会下山の最上部を超えてさらに尾根筋をつめると少し下って鞍部に出て、再度西へ木々の中の尾根筋を登ってゆく。傾斜は穏やかになり、道端に大きな岩が見えてくる。蛙岩といわれる場所で、ここで神戸東灘から登ってくる「魚屋道」に合流する。東灘から六甲を越えて有馬へ結ぶ古道 昔の六甲越えの幹線道路である。



蛙岩周辺



蛙岩と蛙岩周辺で合流する魚屋道



2006.7.14.

少し道幅がひろくなり、緩やかな魚屋道をさらに登ってゆく。

急に岩が露出したゴツゴツの岩の間を抜けて行く道となり、ところどころで、海岸側や六甲側の視界が開ける。会下山遺跡から 1 時間ほど さらに岩がごろごろ転がる山道を登りきり、大きな岩山の横を回り込むとぱっと360度展望の開ける「風吹岩」の横に飛び出した。



魚屋道を通して 風吹岩へ



岩肌むき出しのゴロゴロ道になると風吹岩は近い



2006.7.14.



阪神間の市街地・大阪湾遠謀



六甲最高峰や六甲連山がすぐ近くに見える



会下山遺跡から約1時間ほどで大阪湾の大パノラマが見える展望台 風吹岩に 2006.7.14.

さすがに表六甲のハイキングコースの十字路 多くのハイカーが風吹岩の上に立って、360度の展望を楽しんでいる。

眼下にはロックガーデンの岩峰が連なり、その向こうに大阪平野・大阪湾の大パノラマが広がっている。

登ってきた会下山・城山がはるか下のほうに見える。後ろには六甲の最高峰など連山が壁のように並んでいる。

ロックガーデンはもっと荒々しい岩が並んだ景観で、その岩に登るクライマーが見えていた記憶があるのですが、今は緑の中に岩山が埋没して、かつての荒々しさがなくなっている。

植林が進んだのが原因だとおもいますが、私の印象の違いだろうか・・・・・・・・



ロックガーデン越しに 左城山 右会下山 その向こうに大阪湾
風吹岩からの展望 眼下に阪神間がくまなく見える 2006.7.14.



ロックガーデン



風吹岩より



2006.7.14.

展望を楽しんでいると猪れも3頭がハイカーを恐れることもなく、屏風岩の展望台へ悠然と歩いてゆく。

六甲の猪はよく慣れていてリックサックとって行くといわれるが、人の集まるところを猪もよく知っている。

この場所に来るとえさがもらえる。サルの餌場のようなものである。

おばちゃんのハイカーによるといつもこの場所に猪が寄ってきて、えさを少し持ってくるという。驚きました。



屏風岩に現れた猪 まったく人によくなれ 怖がない 2006.7.14.

1.4. ロックガーデンを高座の滝へ下る

阪急芦屋川駅-会下山-風吹岩-ロックガーデン-高座の滝-阪急芦屋川駅

風吹岩で休憩している間に雲行きが怪しくなって、東の六甲の山際からごろごろいいだして、いっぺんに雲が出てくる。これは雨になる。

本降りになる前に下ろうとお尻をあげるとぽつぽつ雨が降り出したが、本降りにならず。湿った風が顔をなせる。予定通り、ロックガーデンの岩道を降りることにする。



岩を伝いながらの急峻なロックガーデンの谷くだりが続く 2006.7.14.



ロックガーデンからの眺望 2006.7.14.

緑の中に包まれているが、岩峰が林立し、関西でのロック クライミング発祥の地である

風吹岩からロックガーデンの谷に入るといきなり、急峻な岩のくだりが続く。ロープや鎖がつけられているので心配はないが、ほぼ垂直に下ってゆく。やっぱり、木々に覆われていて見えなかったが、昔のままの急峻な岩のくだりが続く。雨が降っていて、前のグループも慎重なので時間がかかる。

岩場を抜け、急峻な谷筋を下って 30分ほどで高座の滝につく。藤木久三のレリーフが滝の横の岩にはめ込まれている。もう何十年ぶりである。

ここからは車道が高座川に沿って下ってゆく。高座川の東側の崖が続く尾根筋は会下山の尾根。やっぱり急峻である。



緑に包まれた高座の滝 2006.7.14.

ロック クライミングの先駆者 藤木久三のレリーフがあり ロックガーデンのハイクの出発点

高座川に沿って20分ほど下ってきて 芦屋の市街地まで出てきた時にはまた、快晴。

開森橋からは会下山・城山の向こうに六甲の連山が見える。

約4時間ほどのゆったりハイク いい汗をかいて 心地よい疲労感。今日一日の行程を思い出しながら 芦屋川の駅に戻りました。

かつての禿山が緑の山に 東から 甲山・このロックガーデン・神戸摩耶山・再度山等々阪神間の山々の緑が再生されている。山が荒れていた子供の頃から40年 環境再生には時間がかかる。しかし、こつこつ植林すれば確実に緑は再生する。時間のかかる環境改善にも思いのいった会下山・ロックガーデンハイクでもありました。

高地性弥生集落 これはまた 面白い山歩きのテーマ。簡単には片付けられないテーマである。

産業の米といいながら戦いをもち込んだ鉄の文明史も絡んでいる。

さしずめ 会下山の資料で知った神戸伊川谷の表山高地性弥生集落に行ってください。

いつも通る伊川谷にそんな遺跡があるのか・・・

この遺跡が鉄と絡んでいれば それこそ 面白い 是非探さねば・・・と思っている。

2006.7.14. 六甲を何度も振り返りつつ芦屋川の土手を歩きつつ

2. 弥生の高地性集落 会下山 遺跡 概 要



遺跡の発見

昭和 31 年，市立山手中学校が学校植物実習園 をつくりと裏山を掘り返した時に多くの弥生土器が発見され，その後，数年にわたって遺跡の 発掘調査が行われました。その結果，山頂や狭い尾根筋から 約 2000 年前のムラの跡と当時 の生活道具が続々と見つかりました。

そして，貴重な文化遺産として，昭和 35 年，兵庫県史跡第 1 号に指定されてからは周辺の環境整備が整い，当時の生活跡の復元や解説板も設置され，山の自 然と親しめる阪神間でも珍しい歴史教材園となっています。山頂からは，眼下に芦屋の市街地やシーサイド タウン，湾岸線や大阪湾が一望でき，視界のよい日には東に広大な武庫むこ 平野を経て，遠く北摂 ・ 生駒 山系の山並みを見渡せます。また西は神戸の街から淡路島を，北は林立する表六甲の高峰を間 近に望める優れた立地を占めています。



遺 構

調査によって明らかになった遺構は，数軒分の 竪穴住居跡，山頂部二ヶ所の祭祀場跡を中心に，南北に伸びる細長い尾根と東方向に分かれる尾 根に点々と存在し，墓地やゴミ捨て場などの付属施設も備えており，当時の集落構造がよくわかります。



住居跡

斜面に立地する関係から、住居は高い方に壁を作った半竪穴式のものが多く、最大規模の住居が最も見晴らしのきくいい場所に造られており、室内には炉をもっています。この家にはムラのリーダーが住んでいたのでしょうか。

当時の家の形は、円形が主で、4～5本の支え柱があり、床面に小さな溝が掘られ、室内の排水が部屋を分ける間仕切りの役目をしていたようです。

倉庫跡・火たき場

東斜面では倉庫跡が発見され、ここに収められた生産物は、ムラ全体で管理されていたようです。

また、火たき場の跡が残っており、ソトクド（野外の共同調理場）とも、のろし施設とも考えられています。のろしは交通や通信の未発達な当時にあっては、最も簡単で確かな情報の伝達手段であり、低地の集落では見ることのできない外来船の航行などを順次告げたのでしょう。

祭祀跡

この遺跡周辺の一番高い場所 2箇所で石組みなど祭祀跡がみつかった。



出土した遺物

出土した遺物は、日常で使用する容器である弥生土器だけでなく、打製磨製の石鏃石錐刃器 石剣 石斧 石錘 砥石・石弾などの武器や生産用具の石器類に加えて、青銅製・鉄製の金属製利器が新たに見られ、特に青銅製の「漢式三翼鏃」は大陸との関わりを示すものである。

また、鉄製釣針やイダコ壺などの漁労具が出土していることから、山のムラであるにもかかわらず、海まで出て漁をしていたことが明らかとなっています。サンドペーパーがわりに用いた軽石も存在し、おそらく木製の容器なども作っていたようです。



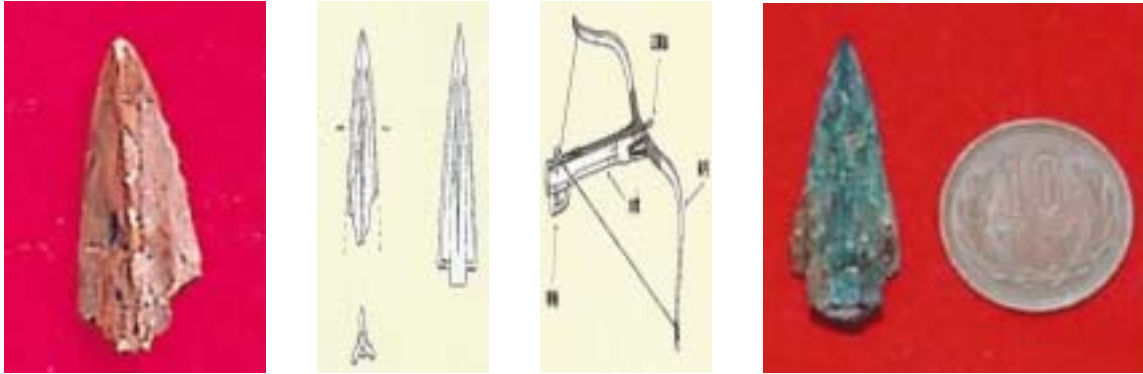
▲会下山遺跡から出土した弥生土器

▲磨製石鏃・漢式三翼鏃・銅鏃

▲砥石・石錘・石弾

三翼鏃 (さんよくぞく)

三翼鏃とは中国の戦国時代から漢の時代に発達した青銅製のヤジリで、「弩(ど)」という発射装置から発射される矢の先に着くもので、このことから中国伝来の武器があったことがほぼ確認されたのである。



三翼鏃

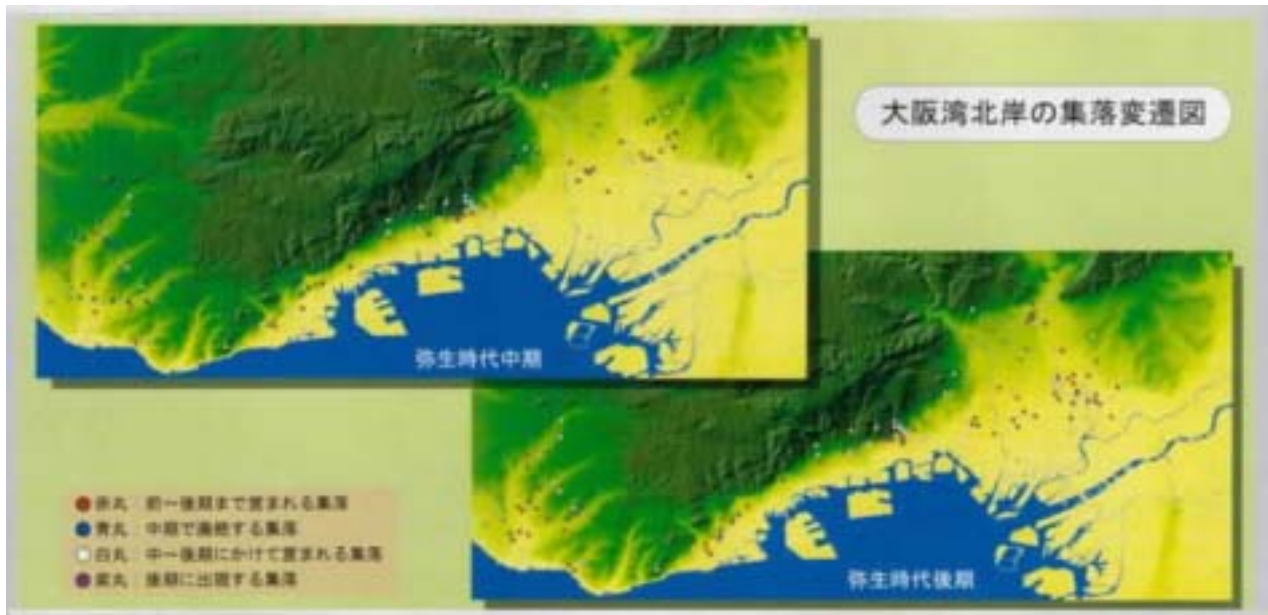
出土三翼鏃実測図

推定復原図

弩図

三翼鏃の大きさ

大阪湾北岸の集落変遷と高地性集落



3. 高地性集落 会下山の集落の出現 大阪湾周辺で 何が起きていたのだろうか

第 35 回尼崎市立田能資料館特別展「弥生の戦」資料より 抜粋

寺沢 2000「六甲山から邪馬台国へ -高地性集落の謎と激動の弥生社会-」より転載



弥生時代の大阪湾北岸の集落の変遷

弥生時代の高地性集落の謎

弥生時代は集落間の戦争が頻発した時代で集落の周りに濠をめぐらせた環濠集落や武器の傷をうけた人骨などが戦乱を裏づける。弥生前期末に出現する環濠集落は村段階、クニ段階の争いに備えた防衛集落であったと考えられている。そして、弥生中期後半になると中部瀬戸内沿岸から大阪湾にかけて高地性集落が出現。

弥生時代の普通の耕作地からみて遙かに高い場所（50～300m）に営まれた集落が出現する。

この高地性集落の目的は何なのか、数々の説が在るがいまだ定説はなく謎である。

山の上の集落であるが、山の下集落との交流や釣り針・漁具・貝に象徴される海との関りも持っていた。

洪水に対する備えであったなどの説もあるが、一般には勢力圏の違う地域間の戦い、つまり九州勢力と近畿勢力というような地域勢力圏を越えた政権争いの戦争に備えた要塞であると推測されている。

会下山遺跡も同じような性格を持つ紀元前 2 世紀から 1 世紀にかけての高地性集落である。

大阪湾周辺での弥生の戦

第 35 回尼崎市立田能資料館特別展「弥生の戦」より 抜粋

昨年 尼崎の田能遺跡資料館で開催された特別展「弥生の戦」では 大阪湾周辺で起こった「弥生の戦」をわかりやすく展示し、弥生中期後半から高地性集落の出現をふくめ、ドラスティックに弥生の集落が変化する様子を戦さとの関係で捉えてまとめている。

高地性集落も 地域間紛争から 国と国の戦いへと戦が変化する時代の進展と共にその性格を大きく変化させる。豊中市勝部遺跡から肋骨及び腰骨に食い込むように打製石剣の刺さった人骨が発見され、大阪湾沿岸部ではこうした戦死した人達を葬った墓が前期 6 例から中期 53 例へと弥生中期になって急激に増加する。

また、人骨と共に武器が出土した例から当時の戦の様子がわかる。

環濠や柵の外から弓矢で攻撃を仕掛け、序所に接近戦に移っていったと考えられる。

弥生中期に戦死者が急増したのはなぜか・・・

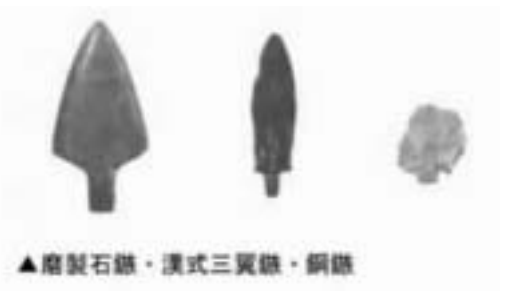
戦は稲作と共に伝来したと考えられている。

稲作伝来以来肥沃な土地を求めて開墾が進み、また水を確保するための灌漑施設も作られた。



こうした資源を中心とした平野や川を中心とした狭い地域での戦いが始まった。

それが 時代と共にもっと大きな地域間戦いとなり、後期末には「倭国大乱」を経験して、地域間の戦は倭全土に広がっていった。



弥生中期の集落は地域の拠点となる集落と周囲に営まれる小規模集落とで一つの地域を形成しているが、後期になると拠点集落が衰退してゆくと共に武器では鉄器が増加する。

そして、中期末から後期前半にかけ、大規模な高地性集落が出現するなど中期までとは社会が変わってくる。その変化をもたらしたのが、「戦」と考えられる。

弥生中期から後期の集落のあり方を5段階に分けて考える。

高地性集落も 地域間紛争から 国の国の戦いへと戦が変化する時代の進展と共に その性格を大きく変化させている

弥生中期から後期の集落のあり方 第35回尾崎市長田能資料館特別展「弥生の戦」資料より 抄録

1. 中期後半～	瀬戸内沿岸部の山口県東部から兵庫県西部まで島嶼・トウショや沿岸部の湖に面した丘・山に営まれる高地性集落の急増期 香川県栗原遺跡・岡山県真光山遺跡などで 石製武器がピークで 瀬戸内海上ルートの抗争が東から西へ移動する
2. 中期末～後期初頭	近畿地方での抗争 平野部での拠点集落が解体、大規模高地性集落が出現し、百練文土器が見られなくなる。 この時期の大規模高地性集落として 神戸西山遺跡(神戸市西区伊川谷)がある。
3. 後期前半の短い期間	近畿地方各地で集落数・土器出土数が減少する一方 高地性集落が各地での代表集落となる この組織の代表的集落として 丹波市会下山遺跡がある。
4. 後期中頃に及ぶ	各地で分村化が進み集落数増加が見られ、地権によっては高地性集落が消滅する。 中畿から後期にかけての地域間抗争が落ち着く
5. 弥生時代末	「諸国の乱」を経験して その後地域間紛争は諸国全土へ広がってゆく。

弥生時代の高地性集落の変遷

寺沢 2000 『六甲山から邪馬台国へ -高地性集落の謎と激動の弥生社会-』より転載

瀬戸内海の高地性集落変遷図 (寺沢2004から転載)

瀬戸内海の高地性集落変遷図 (寺沢2004から転載)

大陸系文物の東方波及 大泉遺跡の多柱壇文銭